

# 金属とガラスの伝統工芸品

# 七宝の技を見てください!



金属の下地に、さまざまな色のガラス質の釉薬を盛り込んで作る「七宝」。その作り方は色盛り、焼成、酸洗い、研磨と主に4つの工程があり、色を入れるたびに焼成と酸洗いを繰り返すため、とても手間がかかります。都内でわずか数軒しか作っていない東京七宝の貴重な担い手・畠山七宝製作所ではどのように作っているのか、製作現場を見せてもらいました。

## 1 色盛り

丹銅という銅合金の板をプレスしてできた下地に、釉薬を1色ずつ盛り込みます。表面に気泡が出ないように、一度薄く盛ったら焼いて、再び色を盛り重ねる「2度盛り」を行います。



デザインの線(溝)からはみ出さないように釉薬を盛ります

釉薬の色見本帳と、配色を書き込んだ畠山さんの七宝のデザイン画

染った先で釉薬をすくって盛るホセ(竹へら)は、職入さんが自ら作ります



100色以上あるという七宝用の釉薬。中には、白く見えても焼くと赤くなる不思議な釉薬も!



中込 瑠璃子さん

色盛りした下地を金網に載せて窯へ入れる畠山さんと、見守るジュニア記者たち

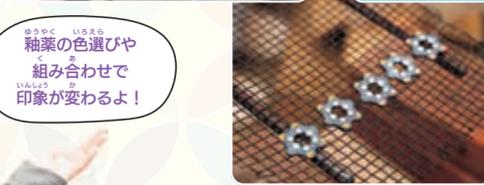
## 2 焼成

乾燥させて釉薬の水分を取り除いた後、780~820℃の温度で2~3分ほど焼きます。熱が加わることで赤くなり、やがて白く変化したら取り出します。そのタイミングは職人の経験と勘で見極めます。



製作所では特注の電気窯を使います。扉には、中を観察するのぞき窓が付いています

焼き上がりの様子。色の付いていない部分はすべて酸化膜ができて黒くなります



釉薬の色選びや組み合わせで印象が変わるよ!

## 3 酸洗い

酸処理とも呼ばれるこの工程は、塩酸と硝酸で黒くなった酸化膜などを落とし、表面をピカピカに仕上げます。化学薬品を使う特殊な加工技術なので専門の免許を持つ職人だけが出来る作業です。



金網のカゴに入れて、塩酸と硝酸の液体に浸けます

ホースから水をたっぷりかけ流して、酸を落とします



洗い上がりの様子。発色の美しさは、この酸洗いかかっています

## 4 研磨

色が全て入り、酸洗いまで終わったら研磨機を使います。水を流しながら、回転する砥石で表面の余分な釉薬を丁寧に削り、埋もれてしまったデザインの線を少しずつ浮かび出させます。



手元の電球で照らし研磨の具合を確認しながら、回転する砥石に当てます



研磨しやすいように木片の型に固定して手に持ちます

色が変わったりピカピカになったり、理科の実験みたい!



小林 倫太郎さん



研磨前と研磨後を比べて見せてくれる畠山さん

### 畠山七宝製作所とは…

昭和26年(1951)に設立し、区内では唯一の七宝の工房。4名の職人が在籍して、独創的なデザインのオリジナル品や企業などから依頼された品を手がけています。金属の枠しかない部分に表面張力で釉薬を盛り込み、焼き付ける高度な技術「ブリカジュール(透胎)」を得意としています。



畠山佳奈さん

### はばたけ! 若手職人展

~技をつなぐ~

「荒川の匠育成事業」の修了者・研修者による伝統工芸品を紹介します。畠山さんの作品も展示されるので、ぜひ、見に行ってみよう!

- 期間: 3月14日(土)~5月31日(日)
- 会場: 荒川ふるさと文化館 ちかかわ伝統工芸ギャラリー
- 観覧料: 無料



### 七宝の技を体験しました!



ジュニア記者たちが選んだデザインは、横向きと正面の2パターンのアマビエ



「何色にしよう?」と配色に悩む小林さん。ホセを使って黄緑色の釉薬を髪のような細い部分に盛り付けます

「釉薬がはみ出ちゃった!」と中込さん。枠からはみ出した部分はペーパーに水分を吸わせて、細い筆で取り除きます



### でき上がり!



ジュニア記者たちの作品がこちら。自や口などの小さな部分の色盛りに苦戦しましたが、同じデザインでも、色の違いで全く雰囲気が変わり、個性が出ました



### 七宝 OXクイズ

- Q1 「七宝」の意味は、仏教の経典に出てくる7種類の宝物のことで。
- Q2 釉薬の主成分はガラス質です。
- Q3 七宝の工程は「下地に釉薬を盛りつけて焼く」の2工程で完成です。

答えは4面にあります